

立教大学学術推進特別重点資金(立教SFR)
大学院学生研究
2024年度研究成果報告書

研究科名	立教大学大学院	文学研究科	超域文化学	専攻
研究代表者 (2025年3月現在のものを記入)	在籍課程・学年	氏名		
	<input checked="" type="checkbox"/> 博士前期課程 2年 <input type="checkbox"/> 博士後期課程 年	末永芽久		
指導教員	所属部局・職名	氏名		
	文学部・教授	野中健一		
自然・人文・社会の別	自然・ <u>人文</u> ・社会	個人・共同の別	<u>個人</u> ・共同	名
研究課題	野生生物を資源化する意義—空間的・時間的な変化に注目して—			
研究組織 (研究代表者・共同研究者) ※2025年3月現在のものを記入	在籍研究科・専攻・課程・学年	氏名		
	文学研究科 超域文化学専攻 博士前期課程 2年	末永芽久		
研究期間	2024 年度			
研究経費 (1円単位)	(支出金額) 200,000円 / (採択金額) 200,000円			

研究の概要 (200~300字で記入、図・グラフ等は使用しないこと。)
当該研究の研究目的を含むこと。 本研究では、身近に得られる食用野生資源の種類と摂取量から食生活への貢献を捉え、過去と現在の獲得・利用活動の実態から、人々の地域環境との関わり方や、山林やその他野生資源を捕獲する自然環境との関わりが維持されてきた背景を考察する。そこで、地理学および生態人類学的方法を用いて聞き取り調査と資料収集、さらに採集活動の直接観察をおこなった。対象地域の自然環境と土地利用の変容に伴う環境変化を考慮し、人々は生活様式が変わる中で自然とどのように付き合い、持続的に利用しているのかに注目した。対象地域は、現在も野生資源利用を通して山林との関わりを維持している岐阜県中津川市付知町を選出した。
キーワード (研究内容をよく表しているものを3項目以内で記入。)
[食用野生資源] [在来知識] [環境利用]

研究成果の概要 (図・グラフ等は使用しないこと。)

以下の視点を含めて記載のこと。

- ・当該研究は何をどこまで明らかにできたのか(できなかったのか)。
- ・何をもって研究成果(経過)を達成できた(できなかった)と考えられるのか。
自身が設定した研究目的・目標に照らして、その根拠がわかるよう記載のこと。

1. 研究内容

近年、野生資源の利用は地球温暖化に対する持続可能な森林管理の方策となる非木材林産物(NTFPS)の利用として世界的に注目されている。しかし、その議論の多くは経済的価値に関するものであり、野生資源を利用する人々が地域や自然環境とどのように関わり持続的に利用しているのかという点に関しては十分に議論されていない。そこで本研究では、地域規模で維持されてきた野生食用資源の利用に着目し、野生食用資源の獲得と利用を通じた土地-食料-人間の相互関係を検討することを目的とする。

調査は2022-24年にかけて中部山間地域に位置する岐阜県中津川市付知町にて聞き取り調査と参与観察を行い、野生資源の利用種類と獲得場所から、人々と地域の自然環境の持続的な関わりを考察した。さらに、地域の食料消費への貢献という観点から、微量栄養素の獲得戦略としての野生資源の役割を検討した。

2. 結果

1) 対象地域における野生資源利用の概要

調査地域である付知町には河川や段丘が分布し、生業は林業を中心に発展してきた。近代化によって生活様式や地域環境は変化した。人々は季節になると野生資源の捕獲や採集をおこなってきた。山菜、キノコ、昆虫、川魚などが副菜や間食として様々に調理され、時にお裾分けとして少量ながらも季節の楽しみとして食べられてきた。高度経済成長期以前の1950年～1960年代と比較すると、2020年代には利用される野生資源の種類は減少しているものの、現在でも利用は継続している。

2) 野生資源が獲得される環境と利用種類

・集落

町中心部には東西を分けて北から南へ、付知川が河岸段丘を形成している。付知川を挟んだ両岸に複数の集落が位置し、集落の中には水田や畑が広がっている。人々は、道端や日当たりの良い草地、川沿い、山裾など、生活圏内でフキ、ワラビ、タラの芽などの山菜を採集する。かつては子供たちが農業用水路でアブラハヤやカジカといった小魚を獲っていたが、用水路がコンクリートで舗装されるようになると魚の数が減り、現在は捕獲の習慣はみられない。また、クロスズメバチの幼虫(蜂の子)は水田近くで捕獲されていたが、農薬の普及により生息数が減少し、現在では住宅地から離れた山林(主に植林地)で捕獲されている。同様にイナゴも稲の収穫後に捕獲されていたが、現在は生息数が減少しほとんど利用されていない。

・河川

町中心部を南北に流れる付知川では、時代によって漁法は異なるが、網やワナ、川を堰き止めるなどして食用魚が捕獲されてきた。かつては小型の魚も含めて多くの種類の魚が捕獲できたが徐々に個体数が減り、現在ではアユやアマゴ、アジメドジョウといった魚が中心に利用されている。

・植林地

町の周囲は戦後から1960年代にかけて植林されたヒノキ林が広がっている。人々は山林でクロスズメバチを追うことで巣を探索し、発見すると地中にある巣を掘り出す。そして、巣箱に入れて飼育し、十分に巣が大きくなると蛹と幼虫を食用とする。右岸は左岸に比べて地形が緩やかで、クロスズメバチを追いかけてやすく、比較的容易に巣を発見することができる。

・二次林

かつて人々は家庭用燃料として樹木の伐採や枝集めを行っていたため、植林地の中にところどころ広葉樹やアカマツなどの二次林が広がっている。こうした二次林にはアミタケやニンギョウタケ、ホウキタケ、マツタケ、クロカワといったキノコが生える。季節になると、人々は各々が把握するキノコの発生場所に通い、キノコの採集をおこなう。また、山菜も自生しており採集される。

研究成果の概要 (つづき)**3) 社会・自然環境変化に伴う利用種類の減少**

聞き取りでは、1960年ごろまでに利用されていた野生種は61種以上であることが明らかになった。しかし、農薬の普及、植林面積の拡大、薪からガス・電気への燃料転換、食生活・生活習慣の変化により、現在利用されている種類は29種類に減少していた。

4) 野生資源に含まれる微量栄養素

日本食品標準成分表を参照したところ、付知町で利用される野生資源にはセレンやクロム、マンガン、鉄や銅、亜鉛といった微量栄養素が含まれていた。

3. 考察**1) 野生資源の利用と二次的エコトーンの継続**

付知町では、植林、稲作、燃料のための樹木伐採などの生業が行われてきた。これらの活動は、一次的な自然を変化させたが、一方で二次的なエコトーンを作り出す。これにより野生生物の新たな生息地をもたらしてきたと考えられる。例えば、稲作には農業用水路の建設が必要であり、これは小魚の生息地となる。樹木が伐採されると二次林が広がり、その環境にはキノコが生える。野生資源の発生場所は、生業がおこなわれる生活圏内にあるため、人々にとって非常に利用しやすい資源であり、身近な野生食用資源として利用されてきたといえよう。

また、野生食用資源は季節感や採集・捕獲の楽しみ、味覚の喜びをもたらす文化的な資源である。その上流動的に変化する「野生」に対し、観察・予測を繰り返しながら試行錯誤する野生資源の利用活動は、地域の環境に対する関心呼び起こし、関連する知識や利用技術を獲得・継承するインセンティブを高めている。野生資源利用の継承と継続により、野生資源を獲得する人々にとってアクセスしやすい地域の自然環境として認識され、結果として二次的なエコトーンの維持につながっていると推察される。

2) 微量栄養素獲得戦略としての食用利用の可能性

多種多様な野生資源の消費は、年間食料消費量のごく一部に過ぎないが、間食や季節のごちそうとして食品の種類を増やす機会を提供するだけでなく、人間の健康や生理的活性化に重要な微量栄養素の摂取を可能にすると考えられる。

4. まとめ

対象地域では住民は生業によって改変された二次的エコトーンに生息する野生資源を獲得していた。また、利用される野生資源は様々な微量栄養素を含むことが明らかになった。生活行動圏内での獲得は地域環境への関心を高め、知識・利用技術の取得・継承の動機づけとなる。社会変化により従来の生業は変化した。適度な野生資源利用の継続により周囲の自然環境は依然としてアクセス可能な二次的エコトーンとなり、野生資源の生息環境が維持されている。対象地域では高度経済成長以降、産業構造や社会環境の変化により、自然環境や生活様式が大きく変化した。この変化は野生資源の生息・生育環境や人々の食習慣に影響を与えることから、野生資源の利用にも影響を及ぼしている。野生資源利用の持続的な利用もしくは衰退の成立条件を明らかにするために、今後はこうした社会的・自然的変化がどのような点で影響を及ぼしたのかを明らかにすることが課題である。

また、本調査では対象地域の住民がそれぞれの季節ごとに食用とする野生資源の量を具体的に調査することができず、微量栄養素獲得戦略の可能性は推測の域をでることができなかった。今後の課題として、実際に採集し1日に食した野生資源の種類、量を計測し、より実証的な調査を進めていくことが必要である。

研究発表 (研究によって得られた研究成果を発表した①～④について、該当するものを記入してください。該当するものが多い場合は主要なものを抜粋してください。なお、成果発表を確認できる資料を合わせて研究成果報告書提出フォームより提出してください (紙媒体等、研究成果報告書提出フォームから提出できない場合は、別途リサーチ・イニシアティブセンターへ提出してください)。

①雑誌論文 (著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ)

②図書 (著者名、出版社、書名、発行年、総ページ数)

③シンポジウム・公開講演会等の開催 (会名、開催日、開催場所)

④その他 (学会発表、研究報告書の印刷等)

※修士論文・博士論文は含みません。

① 該当なし

② 該当なし

③ 該当なし

④ 学会発表

- International Geographical Union. "Wild edible resources incorporated into circular economy: A case study focusing on the Tsukechi Valley, Central Japan".
35th International geographical congress、Dublin city university、2024年8月24~30日
- 日本菌学会関東支部「地域内におけるきのこの食用利用種の違いはなぜ生じるのか?」、第39回シンポジウム、茨城県南生涯学習センター、2025年1月25日
- 日本地理学会「日常生活における野生キノコ採集の継続—岐阜県付知町を事例として—」、2025年春季学術大会、駒沢大学、2025年3月19日~3月21日